

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洸善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？
—こどもの物語と聖書に見られるくしょうがい者>差別—」
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人？ —間 (はざま) から読む聖書—」
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳—野宿生活者の現場から—」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィッシュ〜夢の応援団」(原 順子)

目 次

- 命に触れる 木船 久雄 (2)
- 目を上げて見渡しなさい 河合 佐紀 (8)
- からし種のような私でも 後藤 香織 (12)
- 正義の味方のヒーロー 早川 努 (15)
- 一番はイエス・キリストだった。



命に触れる

木船 久雄

今日は12月5日です。一年の最後の月となる12月は、この1年を振り返る月でもあります。今年あった数々のイベントや深く思い悩んだ出来事を思い出し、今年はどうな年であったかと反省するわけです。そして自分にとってこの一年を表すテーマ、あるいは一年を代表する言葉は何だったのだろうと考えます。

私にとってこの一年を代表する言葉は「命(いのち)」であったように思います。そこで今日は「命」についてお話ししたいと思います。

父の死と限りある時間

「命」という言葉を思い浮かべた一つ目の出来事です。今年1月に父が急に意識を失い病院に担ぎ込まれました。そういうことが3回ほどあり、2月に亡くなりました。最初に緊急搬送された病院で末期の多臓器癌と診断され、余命は数日あるいは長くても1ヵ月と言われました。癌患者は末期になると、突然意識が無くなったり正常に戻ったりという意識混濁の状態が起こります。意識があるときは普通に会話できますし、意識が飛んでしまった時には「あ、どこか別の世界へ行っちゃった」そんな感じになります。それを繰り返して、最後

は夜中に息を引き取りました。

父親が亡くなり、私は大変忙しくなりました。なぜかというところからです。葬儀、母親の年金の手続き、遺品の整理、相続関係。

さらに、夏には初盆を迎えますからその準備。私の実家は静岡県磐田市にあります。その地方の初盆には、お葬式と同じぐらいの数の人達が供養のために家にやってきます。父の場合ですと、お盆の3日間に300人ぐらいの人達が線香をあげに来てくれました。その準備作業が大変です。家の中に大きな祭壇を飾り、来訪者へのお礼も準備します。当然ながら、屋敷のあちこちの掃除もしなきゃなりません。庭の草取りのためだけに、週末を利用して何度も名古屋と磐田を往復しました。

また、父親の生前の身の回り品を片付ける作業もありました。その過程で初めて見る写真や書物あるいは書き物が出てきたりしました。「こんな写真見たことないな」とか、「こんなところから手紙が来ている」とか、多少の驚きを伴いながら、父が生きていたことの証拠品を改めて見るわけです。

そのときの私は、息子としては

なく第三者として父親に一人の男を見ていました。「ああ、この人はこんなところでこんな仕事をしていたのか」、「こんなことを考えていたのか」といった感慨に浸ります。葬儀や初盆の折にも、供養に来られた人たちから「あなたのお父さんには、こんなふうには世話になった」と聞かされ、自分の知らない父親の姿を知らされたものです。

そして「父親からもっと話を聞いておくのだった」、「もっと父親と相談すればよかった」とつくづく思いました。亡くなる前に、もっと父親と話をしておけば、自分の世界はさらに広がり良い知恵も出たかもしれない、という後悔です。人生の先輩の一人として父親から学ぶべきことはもっとあったはずだ、と思うのです。

人は必ず死に、この世に生きてるのは限られた時間です。そんなことは判り切ったことなのに、身近にいる親はそうではないかもしれない、と思い込んでいたのかもしれない。永遠の命など無い。「いつまでもあると思うな、親と金」。それが今年「命」を考えた一つ目の出来事でした。

動物感謝慰霊祭と繋がる命

「命」のことを考えさせられた二つ目の出来事は、毎年11月に瀬戸キャンパスで行われる実験動物感謝礼拝でのことです。何のための礼拝かというと、大学のために死んでいった動物の命に感謝するためのもので

す。リハビリテーション学部ではマウス、ラット、トノサマガエルといった小動物を教育や研究に資する実験に使っています。その動物たちの数は毎年200を超えます。研究や教育のため、人類の進歩のためとは言え、人間の都合で彼らの命を奪っています。その命に対して感謝しましょうというのが、この礼拝の目的です。

昨年の感謝礼拝では、農業実践をされている牧師さんが「命」の話をされました。話の内容を一言で言えば「食物連鎖」についてです。

土壌には微生物がいて有機物を分解します。分解されたものは野菜や樹木といった植物の栄養になる。植物は、それ自体や果実が小動物の餌になり、小動物はもうちょっと大きな動物の食糧になる。人間はこれら植物や動物を生きるための糧とする。そして、植物や動物さらには人間の廃棄物や死骸は、微生物の栄養になる。これが食物連鎖ですね。そうして微生物から大きな動物までが一体となって、地球上の生態系が出来上がっています。

農業を実践している牧師さんの考えは、次のようなものです。食物連鎖は、見方を変えれば、命のつながりの姿です。植物の命が小動物の命につながり、小動物の命が人間の命をつないでいる。だから、意識するかしないかに関わらず、私たちの命は様々な他の生物の命によって支えられている、というのです。

私たち人間は生きていくために食

物をとります。そして、人間の進歩のために植物や動物を利用します。これらは、私たちが直接的に他の生物の命を奪う行為です。そうした犠牲になった動植物に感謝の意を示すだけでなく、私たちの命を支えている全ての命に目を向け、感謝しましょう、というものでした。

瀬戸キャンパスでは、毎年、失われた動物の命に対して、感謝の礼拝をしています。今年もこの礼拝に参列して、今述べたような話を思い出し、あらためて命の連鎖に思いを巡らせました。

動物殺傷の衝撃

三つ目の出来事です。食物連鎖は別として、みなさんは、自らの手で動物の命を奪ったことがありますか？蚊やゴキブリのような虫を殺した、という経験はお持ちでしょう。私はもう少し大きな動物を殺してしまっただけの経験を持っています。

今年11月に、オーストラリアのヴィクトリア州の首相が名古屋を訪ねてきました。私も面談の機会を得て、ヴィクトリア州には忘れられない強烈な思い出があるとして、その話をしました。それが動物殺傷事件で、私が殺めた動物はカンガルーです。

ヴィクトリア州は、メルボルンを州都とするオーストラリア大陸の南端にある州です。その先に南極があります。その観光名物の一つにペンギンパレードがあります。ペンギ

ンは、昼間は南極の海に漁に出ているのですが、日没と共に巣穴に戻るために海から陸にあがってきます。1000羽ぐらいのフェアリーペンギンが一斉に陸にあがってくるのですから壮観です。ペンギンの大きさはせいぜい30cmから50cm。人間など目もくれず、すぐ目の前をヨチヨチ歩きの姿でパレードしていきます。

パレードの時間は日没から夜なので、それを見て家路につくのはだいぶ遅い時間となります。夜10時過ぎであったかと思えます。車を運転してホテルに戻る途上のことです。辺りは街路灯も無く真っ暗の闇です。車のヘッドライトの明かりだけを頼りに、真っ直ぐに延びる道路を運転していました。突然、ライトの中に大きくて黒い物体がバツと飛び込んできました。急ブレーキを踏みましたが、間に合いません。「ドーン！」。

初めは何が起きたのか判りませんでした。キラリと光る二つの目のようなものを見た気がしました。人を轢いたとは思いませんでしたが、あまりの衝撃の大きさに心臓はバクバクしていました。一旦車をバックさせ、衝突事故のあった辺りを捜しましたが、衝突した物体の姿は見当たりませんでした。

ホテルに戻って車のバンパーを見ると、バンパーはひび割れ、ひび割れた個所に動物の毛がついていました。カンガルーの毛です。カンガルーの毛は人間のそれと違い、ゴワゴワとして固くて太いものです。そうい

う毛がボワッとなっていました。

当然こちらは尋常な心持ではいられません。ドキドキと鼓動は高なり、「あのカンガルーどうしたかな？」、「瀕死の重傷に違いない」、「道路に横たわっていて、後続の車に次々と轢かれていたらどうしよう」などと想像しました。日本でも、車に轢かれたネコの死体が道路に転がっている惨状を見ることがあります。ネコよりも相当大きなカンガルーが、血だらけの状態道路を塞いでいたらどうしよう、などと考えるわけです。

その夜はなかなか寝付けませんでした。結局、一睡もしないまま、次の朝、外が明るくなると同時に、4時ぐらいだったと思いますが、一人で衝突現場に行きました。刑事モノで「犯人は犯行現場に戻ってくる」と言いますが、その通りです。私も事故現場がどうなっているか気掛かりで、そこに戻りました。現場はどうなっていたと思いますか。辺り一帯が血の海か、と想像しますよね。

全く違いました。何にも無かったのです。余りにも事故の痕跡が無いことに、驚きました。消えてなくなった、そんな思いです。でも確かに大きな物体とぶつかったし、その証拠のカンガルーの毛も残っています。

州に拠って異なりますが、オーストラリアでは「カンガルーにぶつかった時には警察に通報しろ」と運転教則本で教えられていました。そのため、現地の警察に行き、昨夜のことを報告しました。警察官はなんと

言ったと思いますか？私の話を聞いた警察官は呵呵と笑いながら「車は大丈夫でしたか？」、「保険に入っていますか？」、「保険の適用に必要な証明書を書きますよ」と言うのです。こういう事件は日常茶飯事なのでしょう。手慣れた対応でした。

私の車とぶつかったカンガルーは瀕死の状態で、たぶん死んでいったと思います。しかしカンガルーというのはけっこう頑丈らしくて、道路に飛び込み、ボンと車に轢かれて、その後またジャンプしてブッシュの中に消えていく。ジャンプイン、ジャンプアウトだそうです。だから、道路には何の痕跡も残さない。たぶん、カンガルーはブッシュの中で、痛い痛い悲鳴をあげながら死んでいったのだと思います。

カンガルーの中には2メートルを超える大型のものあって、そういうカンガルーと衝突すると車の方が大破してしまうそうです。日本でも時々、バンパーの前に鉄パイプを付けたレジャー用の車を見かけることがあります。あの鉄パイプは日本では格好付けですけれど、オーストラリアではカンガルー除けの実用道具なのです。カンガルーに当たっても、自分の車が壊れないように、大破しないための道具です。

いずれにしても、私はカンガルーを殺めた経験を持っています。このカンガルーにもおそらく家族がいたでしょう。お腹の袋の中には小さな子供がいたかもしれません。そう思

うと、この事件から一週間ぐらいは夢枕にカンガルーが立ちました。それ以来、私は虫も殺さぬ優しい男になったのです。

命あるモノの命を奪う行為は、それが過失であったとしても、とても心に大きな傷をもたらすものです。

無言館と生かされる命

四つ目の出来事は、今年の夏休みの経験です。この夏、私は黒部第四ダムを見学し、その帰りに長野県上田市を訪ねました。そこに「無言館」という美術館があります。この美術館は、戦時中の画学生が描いた作品を展示しています。画学生たちは、遺作となる作品を描き、戦争に出かけて還らぬ人になりました。そういう画学生たちの作品ばかりを展示しているのが無言館という美術館です。

例えば、女性の裸婦の絵がありました。「私は戦争に行く前に初めてこの裸婦を描いた」、「妻をモデルに初めて裸婦像を描いた」と、そんなメッセージが付いた作品があるわけです。戦争に行く。それは死に行くことと同意です。それを承知して、それまでの限られた時間を惜しんで絵に情熱をかけた人たちの作品群です。それぞれの作品は、まさに画学生たちの生きた証そのものなのです。

彼らは望んで死に向かうわけではありません。命があれば絵を描きたい。ところが、戦争のために理不尽にもその願いが叶わず、せめて残る時間を自分の作品に費やしたい。そう

いう思いが残る作品群を目のあたりにすると、見学者たちも自ずと「無言」になってしまいます。限られた命の時間と情熱を費やした作品群を前にして、こちらの魂まで震えてしまう、そういう経験をしました。

無言館の館長は、窪島誠一郎さんという方です。窪島さんは作家の水上勉さんの息子です。この窪島さんは人間には二つの命があると言います。一つは私たちが親からもらったこの命そのものです。もう一つの命は私たちが生きていく間に、人と触れ合って生まれる命のことで、これを「生命」といいます。

「生命」は「生きる命」、または「生かされる命」のことです。自分だけでなく、他人との関係のなかで生じます。触れ合い、感動させたりさせられたり、元気付けたり付けられたり。他人と繋がることによって自分の命が生かされ生きていく。それが「生命」です。

だから私たちは、与えられた命を一生懸命生きて、他の命と響きあい繋がりあいながら生きていくのです。その時に「生命」という「生きる命」そのものが生まれてくる、というような言い方をしています。以上が命を考えた四つ目の出来事です。

そんなことで、今年は、私にとって命を考える年になりました。

まとめ

最後に話をまとめます。

一つは、当たり前のことですが、皆

さんも命を大事にして欲しいということです。もう一つは、窪島さんの言葉じゃありませんけれども、人と人との繋がりをより強くして、生かされる命、あるいは人を生かす命を認識して欲しいということです。

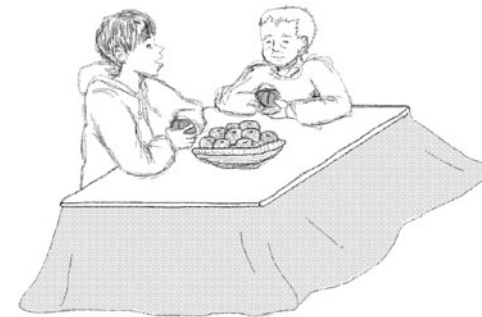
人は必ず死にます。限りがあるから命が大事なのです。限りがあるからこそ他人と接触する時間も限られ、互いを尊重しながら大事に生きることが重要なのだと思います。

今年の年末年始には是非、おじいちゃんおばあちゃんに会ってください。そして一緒にみかんを食べる、一緒にお雑煮を食べる。そんなことも

して欲しいと思います。おそらく皆さんのおじいちゃんおばあちゃんが、皆さんと一緒にお雑煮を食べるチャンスはそう多くはありません。あと10回あるかないかかもしれません。そう思えば、わずかな時間しか残されていないと思えば、語り合う内容も深くなることでしょう。そして、心と心の響きあう機会も多くなると思います。

この機会に皆さんも自分の命を大事にすること、人の命を大事にすることに思いを馳せていただけたらと思います。

(きぶね ひさお 学長 2013.12.5 カレッジアワー奨励)



目を上げて見渡しなさい

河合 佐紀

アブラムは、妻と共に、すべての持ち物を携え、エジプトを出て再びネゲブ地方へ上った。ロトも一緒であった。アブラムは非常に多くの家畜や金銀を持っていた。ネゲブ地方から更に、ベテルに向かって旅を続け、ベテルとアイとの間の、以前に天幕を張った所まで来た。そこは、彼が最初に祭壇を築いて、主の御名を呼んだ場所であった。

アブラムと共に旅をしていたロトもまた、羊や牛の群れを飼い、たくさんの天幕を持っていた。その土地は、彼らが一緒に住むには十分ではなかった。彼らの財産が多すぎたから、一緒に住むことができなかったのである。アブラムの家畜を飼う者たちと、ロトの家畜を飼う者たちとの間に争いが起きた。そのころ、その地方にはカナン人もペリジ人も住んでいた。

アブラムはロトに言った。「わたしたちは親類どうしだ。わたしとあなたの間ではもちろん、お互いの羊飼いの間でも争うのはやめよう。あなたの前には幾らでも土地があるのだから、ここで別れようではないか。あなたが左に行くなら、わたしは右に行こう。あなたが右に行くなら、わたしは左に行こう。」

ロトが目を上げて眺めると、ヨルダン川流域の低地一帯は、主がソドムとゴモラを滅ぼす前であったので、ツォアルに至るまで、主の園のように、エジプトの国のように、見渡すかぎりよく潤っていた。ロトはヨルダン川流域の低地一帯を選んで、東へ移って行った。こうして彼らは、左右に別れた。アブラムはカナン地方に住み、ロトは低地の町々に住んだが、彼はソドムまで天幕を移した。ソドムの住民は邪悪で、主に対して多くの罪を犯していた。

主は、ロトが別れて行った後、アブラムに言われた。

「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数えきれないように、あなたの子孫も数えきれないであろう。さあ、この土地を縦横に歩き回るがよい。わたしはそれをあなたに与えるから。」

アブラムは天幕を移し、ヘブロンにあるmamレの檜の木のところに来て住み、そこに主のために祭壇を築いた。

(旧約聖書 創世記13章1～18節)

ここではアブラムと書かれていますが、後には「アブラハム」という名前を神様からいただきますので、この奨励でもよく知られているアブラハムという名前を使いたいと思います。

このアブラハムにはロトという甥がいました。彼らは長い間一緒に旅をしてきました。ところが、本来は喜ぶべき彼らの財産、具体的には羊や牛などの家畜ですが、これが増えることでアブラハムとロトの間に争いを引き起こしてしまいます。家畜のための牧草や水が足りなくて、アブラハムの家畜を飼うものたちとロトの家畜を飼うものたちとが必要なものを奪い合う状況となってしまったのです。そして長い旅を一緒に続けてきたアブラハムとロトは、ついに「もう一緒にはやっていけない。」という所に来てしまいました。

そこでアブラハムはロトに「ここで別れよう。」と提案します。ここで注意しなければならないのは、年上

のアブラハムの方が若い甥のロトの方に先に行き先を決める権利を与えていることです。当時のイスラエルの社会では、年上の人間は非常に尊重されました。しかもアブラハムは一族のリーダーですから、当然先に土地を選ぶ権利はアブラハムが持っていたと思います。しかしここでアブラハムはロトに向かって、「あなたが左に行くなら、私は右に行こう。あなたが右に行くなら、私は左に行こう。」と言います。ロトは早速目を上げて土地をよく眺め、ヨルダン川流域の豊かな低地に目を留めました。そこには水が豊かにあり、土地も良く肥えていて、人間の食べ物も牧草もよく育ちそうです。ロトは、さらなる豊かさを求めて低地の町を選び、そこに住むことにしました。ロトは、アブラハムのもとから立ち去りました。アブラハムは一人荒地に残されました。そこはロトが選んで移住していった低地の町と違って、乾燥した赤茶けた地面が広がる痩せた土地

でした。なぜここでアブラハムが自分より年が若く、立場的にも下にいるロトに土地を選ぶ権利を与えたのか聖書には書かれていません。しかし確かなことは、アブラハムは、ロトに土地を選ぶ権利を譲ったということです。その結果ロトは楽で豊かな土地を選び、アブラハムは豊かな土地に行くことはできなくなってしまいました。そして彼は農業や牧畜には不向きな痩せた土地を選ばされることになりました。

自分が思うような、自分が理想とする事柄を選ぶことができない、私よりも先に誰かが選ぶ権利を使ってしまって、自分には良いものが残されていない、より貧しく困難な場所を選ばされる、そういうことは私たちの人生にもたくさん起こることではないでしょうか。学生のうちはまだ自分の努力が成績という形で評価されます。しかし一旦社会に出たらそこには理解しがたい不条理な壁がたくさんあります。ある人の才能や努力が本当に認められるのは稀なことです。才能でも努力でも人柄でもない、親のコネであったり、上司に気に入られていたり、あるいは財産を始めからたくさん持っている、そういう人間があなたがたを追い越し、足蹴にして出世していく。そういう人間の醜さをあなたがたは経験することになるでしょう。私たちが本当はやりたい仕事、行きたい場所を誰かに無理やり譲らされる、引き摺り下ろされてしまう。格差社会という

ことが一時期話題になりましたけれども、それがもう当たり前になってしまっています。強いもの、力のあるものはますます強くなり、弱いもの貧しいものはどんどん隅に追いやられていきます。本来誰もが持っているはずの積極的に選ぶ権利が与えられない、残された状況、残された場所にいるしかない、豊かな土地は誰かが先に持って行ってしまいました。

目の前にあるのは、痩せて見るからに貧しい石ころだらけの地面です。アブラハムはおそらく下を向いていたことでしょう。彼の場合は、自分からロトに土地を選ぶ権利を与えたのです。しかしそれでも、これから先、自分と自分の一族が背負わなければならない重荷を思った時にアブラハムは非常に落ち込んだと思います。しかし、そういうアブラハムに対して主なる神様は「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。」と声をかけられました。神様が声をかけたのは、人間的に有利な賢い選択をして去っていったロトではなく、自分が選ぶ権利を失い、困難な荒地に取り残されたアブラハムの方でした。神様はあなたがいる場所から、あなたが自分の意思に関わらず置かれてしまったその場所から、東西南北を見渡しとされるのです。そこで膝を抱えて下を向いてうずくまってしまうのではなく、四方をよく見てみなさいと言われます。そこに私たちが希望を置くことのできる何かを見出すことがで

きるかもしれません。

さらに「さあ、この土地を縦横に歩き回るがよい。わたしはそれをあなたに与えるから。」と言われます。実際に見るだけではなく、歩き回って動いてみなさい。置かれた場所で、自分で動いて経験をみなさいと言われます。そしてそこで得たものを神様は与えられるのです。神様の言葉を聞いたアブラハムがどんな感想を持ったのかということは聖書に記されていません。アブラハムは、「ヘbronにあるマムレの榎の木の下に来て住み、そこに主のために祭壇を築いた。」と聖書には書かれています。「主のために祭壇を築いた。」つまり神様に祈る場を持って生きたということです。神様はこのアブラハムを最後まで導き祝福をされました。

自分が思い描いた未来を与えられない。それは私たちの人生で必ず起こることです。しかしその時、本当に顔を上げられないくらい落ち込んでしまった時、あるいは豊かなものを選ぶことができた誰かに対して妬みや恨みの気持ちを持ってしまった時、「目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。」と言われた神様の言葉を思い出していただきたいのです。貧しいままでいい

のです。だって貧しい場所に置かれてしまったのですから。そして人を憎んでいても恨んでいてもそれは仕方がない。人間は自分が踏みにじられて誰かを恨まずにすむほど強くありません。その人間の弱さを担ってくださったのがイエス・キリストという方です。ただしその場所に閉じこめるのではなくて、その場所から見える東西南北を見なさいと神様は言われます。この土地を歩き回れと命じられます。自分の見える範囲、本当に暗闇に閉ざされて自分の手元しか見えないかもしれない、しかしその中においても私たちはとりあえず目に入る所を見て自分ができることを探みなさいと、そのように神様は言われます。私の置かれた場所が誰も振り向かない荒地であっても、歩き回って手探りで様々なものを探しながら進んで行ったら、もしかしたらそこに輝く何か落ちていたりかもしれないじゃないですか。あるいはそこに自分の探していた大切な何かを見出すかもしれません。そして、もし「神様感謝します。」と言えることが何か見つかったとしたら、どうぞあなたの心にも祭壇を作って、神様に感謝の祈りを献げてください。

(かわい さき 日本基督教団豊明新生教会牧師 2013.5.28 チャペルアワー奨励)

からし種のような私でも

後藤 香織

更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」

(新約聖書 マルコによる福音書4章30～32節)

日本聖公会というキリスト教の教派の司祭をしています、後藤香織といいます。聖公会という教会の名前を聞いたことがある方はあんまりいらっしゃらないと思うのですが、イギリス国教会の流れを汲む教会です。結婚式ですと、ロイヤルウェディングというのがよく結婚式場のコマースで使われますけども、ロイヤルウェディングというのが私たち聖公会という教会の礼拝の形です。そういう教会の司祭をしています。

今日の聖書の箇所は「からし種の例え」といわれるところです。からし種というのはからしの種ですが、日本の和辛子と呼ばれるものとは種類が違うもので、本当に小さな種です。誤って息を吹きかけると飛んでいってしまうほど小さい種です。そんなとるに足りない種が、今日の聖書箇所では、蒔くとどんどん成長して、ど

んな野菜よりも大きくなるのだ、ということが語られています。そしてさらに、葉の陰に空の鳥が巣をつくれるほど大きな枝を張るのだということがいわれています。今日はご一緒にこの小さなからし種に思いをさせてみたいと思います。

私たちの社会はちょっと前までマスの時代、大衆の時代といわれていました。大衆が色々なことを発言するようになって主張する時代だ、といわれていました。ですけれどもそれは同時に人が孤独になってしまった、そういう時代でもあったように思います。多くの人の中に埋もれるとき、私たち一人一人はとってもちっぽけな存在であると感じることがあります。私一人がいなくなったとしても何の影響もないと思えるほどですね、私の存在は小さなものだと感じる、そういうことが皆さんはないでしょうか。全く私たちの存

在がかえりみられない、そういう時代が今までの時代だったように思います。皆さんはご自身のことをどのようにとらえられていらっしゃるでしょうか。社会の役に立つ必要な人間だと感じている人もいらっしゃるかもしれませんが、反対に取るに足らない存在だと感じる人もいるのではないのでしょうか。

昔は私、取るに足りないというよりも、私自身をとっても不必要な、悪い存在であると感じていたことがあります。私はキリスト教の中では評判の悪い牧師なのです。なぜかといいますと、私はキリスト教の中では罪深いとされていますセクシャルマイノリティーという存在だからです。(2013年6月)27日の新聞に、アメリカの新聞で同性婚が一応認められたことが大きく報じられました。テレビや新聞で取り上げられ、色々な方がコメントを述べていました。中には家族制度を崩壊させるような大変問題のある判決だと言う日本の社会学者の方もいらっしゃるぐらいで、まだ同性愛、同性婚というのはイメージの良いものではないように思います。私は同性愛者ではないですが、生まれたときは男性でした。男性だったのですが、途中で女性として生きることを決断したトランスジェンダー、病名でいいますと性同一性障害、そういう存在です。ですからあまり教会の中では好ましくないと思われています。そういう私自身、高校生や大学生の頃、教会に通いなが

ら好ましくないと思っていました。その当時は男性として暮らしていましたので時々女性の服を着るということをしていたのです。いわゆる女装をするということです。ですが女装はあまり好ましくないことだと思っていました。皆さん女装をする人をどう思いますか。あまり好意的には今でも思われたいのではないかと思います。私もそう感じていましたので、いけないことをしているという罪悪感でいっぱいでした。ですから女装をするということがばれないように無理をして普段は男らしく振る舞っていました。男らしさというのが当時よくわかりませんでしたので、乱暴なこととか、粗野な素振りをすることが多くて、そんな自分に同時に嫌悪感を持っていました。女装するとちょっと安心しますが、罪悪感がありますし、男らしくしようと思うと嫌悪感がありました。そのためにとても自分自身を小さいとか余計な存在だと思うこともありました。

今日の聖書の箇所では、イエス様はこの小さなからし種一粒に注目してください。そして神の国はこのようなのだとさえ、おっしゃっています。この小さな種が地に蒔かれると本当に大きな木になって空の鳥が宿るほどになるといわれます。一粒の小さなからし種が空の鳥を宿すほどの木に成長するように、私たち一人の人間はたとえその存在がからし種のように小さく不必要に

見えても思えたとしても、かけがえのない存在であるということを今日の聖書の箇所は私たちに伝えようとしているのではないかと思います。そしてそれは同時に、他の誰にも代えられないその人固有の使命を持ってこの世に命を与えられているということを今日の聖書の箇所は私たちに伝えてあります。どんなにちっぽけだと自分自身が感じたとしても、私たち一人一人が本当にかけがえのない大きな使命を与えられています。その使命を自覚したときに、誰から見てもとても存在感のある大きな木となり、さらにそこに鳥が宿る、ということが言われています。私たち自身の満足で終わることなく誰かの安らぎの場となっていく、そういう存在として命を与えられているということが今日の聖書の中でしっかりと語られているメッセージではないかと思えます。自分自身を大切に生きてときに、本当に充実感を感じます。けれども、そのかけがえのない存在が私だけではなくて隣の人、他の誰かをも幸せにしていくことができる、そういう力を私たちが与えられていることを、今日一緒に覚えていきたいなと思えます。そのよう

(ごとう かおり 日本聖公会司祭 2013.7.2 チャペルアワー奨励)

に自分自身の使命を、他の人々の尊厳を大切にすることのできる存在であることを、私たちが受け止めたときに本当に素敵な社会を実現してることができるのではないかと思います。イエス様もそういう社会こそが神の国であると今日の聖書の箇所です。

私自身、性同一性障害、トランスジェンダーとして生まれたことを最初は受け止めることができませんでした。けれども今、私はこのように生まれてきたことを良かったとできています。それは私自身が使命を与えられて、命を与えられたこと、そして私が元気に生きることによって同じような境遇の人が「元気を与えられる。」といてくれる、そういうことに力と励ましを受けてここに立っているからです。どうぞ皆さんも、自分自身の使命、自分自身の命の大切さというものを本当にしっかりと感じていただき、与えられている命を光輝かせながら生きていくことによって、この社会を本当に素晴らしい社会にしていく、そのような使命をご一緒に担っていただければいいな、と思えます。

正義の味方のヒーロー 一番はイエス・キリストだった。

早 川 努

「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きてる間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。』金持ちは言った。『父よ、ではお願いします。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。』

アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』

(新約聖書 ルカによる福音書16章19～31節)

今回の聖書のお話の最初の方だけでもいいから想像してみてください。

金持ちが紫色のサラサラな絹かなにかの素敵な着物を着て、ちょっとふんぞり返って、優雅に楽しく暮らしていました。その家の門の前に体も顔もできものだらけで、病気で働くこともできないラザロという憐れな男が乞食をしていました。犬もラザロのできものから出る膿をペロペロと舐めていました。ある時そのラザロは死んで天国に行きました。生きている間、優雅に楽しく暮らしていた金持ちには地獄が待っていました。要するにそういう話ですね。ちょっとあまりに単純すぎるんですけど、子どもにはイメージがわかりやすい話です。

私にとってこの話は、物心ついた頃に父親が与えてくれた絵本で読んで、ずっと心に残っている話です。私の父親は左官といって、壁などをコテで塗ったりする、そういう職人でした。そういう職人さんは日当が高くてけっこう儲かるみたいと思われるところもあるみたいですが、6月や7月の梅雨の時季など、雨が降ると外の仕事はみんな休みになって、そうすると日当が手に入ってきません。けっこう家計が苦しく、豊か

どころかむしろ貧しい家庭だったと思います。そんなこともあってか、この貧しい人にいつも心を向けている神様、イエス・キリストというのが、じつは私の中では一番の正義の味方でした。

私は今年50歳を迎えました。子どもの頃は仮面ライダー、ウルトラマン、キカイダー、鉄人28号とか、ちょっと古いのでは宇宙少年ソランとか、知りませんよね、いっぱいヒーローがいた時代でした。そういうヒーローたちというのは、悪い敵をやっつけて、泣いている人、困っている人を助けるわけなんです。けれども必ずしも悪い人をやっつけるわけではないイエス・キリストこそが、私の中ではいつも、貧しい人泣いている人苦しんでいる人の味方で、一番のヒーローだったんです。

先日、やなせたかしさんという漫画家が亡くなりました。アンパンマンをつくった方です。私はアンパンマンが世に出た頃にはいい大人だったので、ほとんどアンパンマンを見たことはありませんでしたが、世の中の子どもたちに人気があるので少し関心を持って見ていたら、アンパンマンも弱いヒーローです。お腹を空かせている人にいつも心を向けるヒーローです。自分自身の顔を食べ

させて、その人を飢えから救う優しいヒーローです。けっして悪いやつをやっつけちゃうっていうヒーローではない、そんなことを後から知りました。

ただ、だんだん自分が成長するにつれて、このキリスト教の教え、つまりイエス・キリストあるいは神様が、貧しい人、弱い人、困っている人の味方だという教えは、いわゆる逆差別じゃないの、と思うようになったんですね。そんなふうを考える人いませんか。

今の世の中で正しいと思われている一つの価値観は平等です。貧しいからという理由で特別に何か恩恵を受けるとするのは不平等ではないか、そのようにも考えられますよね。

私が聖書の中から得た答えは次のようなものです。もしチャンスがあったらルカによる福音書15章の「放蕩息子のたとえ話」というのがあるのでそれを読んでいただくといんですが、神様はあるいはイエス・キリストは、貧しい人、苦しんでいる人、困っている人にそうでない人が心を向けることを望んでいます。今私は困っていない、今私は苦しんでいない、今私は飢えていない、そういう人たちは、今泣いている人、今飢えている人、今貧しくて困っている人に憐れみの心を向けることで、言いかえれば共感することで、自分自身が貧しくなくても貧しい人の苦しみがわかる。自分自身が飢えていなくても飢えている人の苦しみがわか

る。そんなふうには他者の苦しみを自分のことのように感じる事ができたならそこに救いが訪れる。そこに絆ができる。そこに幸せがやってくるということです。

イエスは別に金持ちや今貧しくない人たちのことはどうでもいいと思っているわけじゃないのです。むしろ私と一緒に貧しい人のことを考えてください、私と一緒に泣いている人のことを考えてください、と訴えています。そうすることでみんなが幸せになれるということです。

皆さんにぜひ伝えたいことが二つあります。一つは今話したように苦しむ人や泣いている人に共感する心を持って欲しいということです。そして二つ目、そういう人々を助けるためには正しい知識を持って欲しい。世の中のことについて客観的に学んで欲しい。そのことを伝えたいと思います。

先ほど、やなせたかしさんのことを話しました。やなせさんはご自身戦争に行った体験があります。その経験から「本当の正義というのは飢えている人を助けることだ」という結論を得て、アンパンマンを通して訴えたと言っています。戦争に正義の戦争というのはありません。私たちの家族や国土を守るために戦うと言いますが、実際に軍隊が守ろうとするのは国民ではなくて「国家という体制」を守ろうとするものなんです。そのことは過去の歴史をつまびらかに学んでいけばわかります。

歴史に関しては二通りの考え方がありますね。できるだけ過去の事を事実に照らしてきちんと伝えていこうという科学的な立場です。もう一つは、国の中で教育として伝えていくためには、みんなが誇りを持てるように伝えていこうという立場です。どちらも大切かもしれませんが、でも皆さんに知って欲しいのは、現実は何のようなものだったのか、事実は何のようなものだったのかということです。きちんと客観的に調べて知識を得るということをして欲しいと思います。せっかく皆さんが高い志、優しい心を持って世の中に出て行ったときに、そもそもの事実の認識が誤っていたのでは、その志を生かすことができません。

私は子どもの頃からずっとクリスチャンではありましたが、でも今みたいに教会の神父として働くとは夢にも思っていませんでした。そんなことは、じつはしたくはなかったんです。普通の、たぶん皆さんと同じよ

(はやかわ つとむ カトリック高蔵寺教会神父 2013.11.29 チャペルアワー奨励)

うに、笑顔の絶えない明るい家庭を持って一市民として働くというのが夢でした。けれどもある時、いろいろなことがあって司祭としての道を志しました。ちょっと大げさなことを言いますが、この世界に平和をつかっていくためには、まずみんなの心が変わっていかないとけない、すべての人が平和を愛し、人を愛する、そういう心を伝えていきたいと思って司祭になりました。私はアメリカとソ連という国がいつ核戦争を起こすかわからない、そういう不安な時代に育ちました。ですからいつも、どうしたら戦争を回避できるのか、戦争をしないで済むにはどうしたらいいかということをずっと考えながら大人になってきました。そして私なりに出した結論が、キリスト教の神父になって私の一番のヒーローを皆さんに知っていただき、そのことによって人を愛することの大切さや平和を追求することの大切さを伝えたいということでした。

